

陽林会（第13回）京都 北野天満宮と本法寺の旅

平成29年12月8日

平成29年12月5日（火）林陽寺駐車場を7時に出発、岐阜駅にて名古屋・岐阜組の12名が乗車し、総勢19名にて京都に向かう。名神羽島より高速を一路京都へ、途中多賀SAにより小休止10時10分京都東にて高速を降り、11時最初の訪問地北



野天満宮に到着。天満宮では宮司さんのお迎えを受け、身を浄めて本殿へ正式参拝。祝詞を上げてもらい家内安全・身体健全、道中安全を祈願、その後、1時間ほど境内の案内を受ける。12時過ぎに天満宮の門前「たわらや」にて名物「一本うどん（極太、もちもち）」にて昼食。その後バスにて次の訪問寺院本法寺に3時頃到着。

本堂にて読経・法話、宝物館にて長谷川等伯の「涅槃図」の説明を受ける。4時過ぎに寺を後に、近隣の表裏千家、茶道会館、千利休居士遺跡－不審庵－などを見学し、帰岐。7時30分頃帰る。ご苦労様でした。

北野天満宮

御祭神に菅原道真公をお祀りした全国天満宮・大神社12000社の宗祀（総本社）の神社です。天神信仰発祥の社として今から千年余り前の村上天皇天曆元年（947）6月9日、ご神託により平安京の大門にあたる北野に御鎮座致しました。天徳3年（959）右大臣藤原師輔卿が御社殿を造営、一條大皇により北野祭は官祭に与り、「北野天満大自在天神」の神号を賜り、さらに皇室・朝廷の崇敬を受け二十二社に加えられ、臣下として初めて官幣中社に列格、皇城镇護の神として崇められるとともに、大満宮・天神社の総本社として崇敬されてきました。



創建以来、御皇室との御縁深く、寛弘元年（1004）には一条天皇がはじめて北野社に行幸されました。以来歴代天皇の行幸も20数度に亘り、さらに将軍家や有力大名の崇敬を受けました。菅公薨去延喜3年（903）より凡そ百年の歳月をかけて誕生した北野の天神信仰は、平安京の大門にあって、朝野を問わず人々の暮らしの最も重要な指針となり今日まで育まれてきたのです。

「文道大祖風月本主」と崇められた菅公は、和魂漢才の希神で誠の心を以って学問に勤しまれたことから、学問をはじめ芸能・農耕・厄除け・至誠・冤罪を晴らす神として奉祀されるとともに、人々の心の見えとなる神とし

て、各時代の社会構造と相まって篤い崇敬をうけ、庶民に至るまで「天神様」として親しまれてきました。菅公は、学者・政治家また詩人・教育者として多方面に活躍され、生涯一貫された「誠の心」は、日本人の感性として現在も生き続けています。千有余年に亘る歴史の中で受け継がれてきた天神信仰の根本を示すのが、当宮所蔵の国宝「北野天神縁起絵巻」永久本です。数ある縁起絵巻の中で唯一無二の神社絵巻物であり、その信仰性や描かれる世界観、美術的価値は世界が認めるところであります。また現在の御社殿は、豊臣秀吉公の遺命により豊臣秀頼公が片桐且元を奉行として、慶長12年(1607)に造営された一大建築群です。御本殿は八棟遣と称され、国宝の指定を受け、桃山文化の代表として、その絢爛豪華さはいうまでもありませんが、特に多数の桃山建築中でその創建当時の規模そのままに保存されているのは当宮が唯一のもので、後世の権現造の原型となるなど神社建築史に多大な影響を与え続けています。(天満宮パンフレットより)

御土居 (おどい)

豊臣秀吉によって作られた京都を囲む土塁である。外側の堀とあわせて御土居堀と呼ぶ場合もある。天満宮は梅とともにモミジが有名。境内西側のもみじ苑には史跡「御土居」があり、モミジが約300本、中には樹齢350年から400年のものが数本ある。これは菅原道真公がこよなく愛でた縁の深いモミジで、今も御神徳を偲ぶかのように境内を彩る。また、600年余の榎もありまさに自然林の風格である。御土居に沿って流れる紙屋川は、色づいたモミジで覆いつくされ京都でも有名な「紅葉苑」である。この御土居からみる権現造りの本殿は素晴らしい景観を見せてくれる。(ネットより)



居」があり、モミジが約300本、中には樹齢350年から400年のものが数本ある。これは菅原道真公がこよなく愛でた縁の深いモミジで、今も御神徳を偲ぶかのように境内を彩る。また、600年余の榎もありま



に自然林の風格である。御土居に沿って流れる紙屋川は、色づいたモミジで覆いつくされ京都でも有名な「紅葉苑」である。この御土居からみる権現造りの本殿は素晴らしい景観を見せてくれる。(ネットより)

叡昌山本法寺

当寺は、室町時代に活躍した日蓮宗僧侶、久遠成院日親上人(1407-88)によって築かれた日蓮宗の本山です。開創の時期や場所については諸説あって、明らかではありませんが、永享8年(1436)に東洞院綾小路で造られた「弘通所」が始まりとされています。その後、永享12年(1440)に、日親上人の幕府諫暁が原因で破却され、康正年間(1455-57)に四条高倉で再建しました。



寛正元年(1460)、2度目の破却に遭った本法寺は、三条

万里小路に移転して復興を果たすと、日親上人はこの寺を一門の中心地に定めています。その後、本法寺は隆盛し多くの僧侶たちが棲むところとなり繁栄しましたが、天文5年(1536)の法難によって一時は都を追われ、大坂堺に避難する事となりました。後に一条戻橋付近で再興し、さらに天正15年(1587)、豊臣秀吉の聚楽第建設に伴う都市整備の影響で、堀川寺之内へ移転して今日に至っています。



現在地に移転したときの貫首日通上人は、外護者であった本阿弥光二・光悦親子の支援を受けて堂塔伽藍を整備し、本法寺は京都の町に一大栄華を誇るまでに及びました。しかし、天明8年(1788)に襲った大火は本法寺の伽藍をのみ込み、経蔵と宝蔵を残すだけとなりました。その後、檀信徒達の堂塔再建に対する願いは着々と結実され、本堂・開山堂・多宝塔・書院・仁王門などが整備され、今の本法寺となりました。

長谷川等伯と佛涅槃図

長谷川等伯(1539-1610)も本法寺に縁の深い芸術家として知られています。等伯は能登国・現在の石川県七尾で生まれ、故郷の七尾を中心に絵師として活動していました。



その後、養父母の死をきっかけに拠点を京都へと移し、生家の菩提寺の伝手で本法寺塔頭の教行院に住み、制作に取り組んでいきました。天正17年(1589)、51歳の等伯は大徳寺の三門楼上壁画と三玄院障壁画を描き、都で名の知れた絵師となります。翌年には御所の障壁画制作を依頼されるまでになりましたが、当時の画壇に君臨する狩野派の妨害によって、苦汁を飲まされる結果となりました。しかし、その後は豊臣秀吉から祥雲寺障壁画の制作を依頼されるなど、画壇における地位を確固たるものにします。こうしてみると、等

伯にとって充実した活動時期のようですが、背景には彼を取り巻く人たちとの死別が、大きな影響を及ぼしています。

等伯が52歳の時、親交が深かった千利休が秀吉の命によって自刃し、さらに55歳の時には、制作の片腕として一番の信頼を寄せていた息子の久蔵を26歳という若さで失い、深い悲しみに見舞われました。そのような中で『松林図屏風』(国宝・東京国立博物館)など水墨画の優れた作品が描かれており、心の内を墨の濃淡で表現しているようです。

その後、60代になると大作を次々と手がけ、そのひとつに本法寺の『佛涅槃図』(重文)があります。この作品は京都三大涅槃図のひとつに数えられ、描表具を含めると縦10m・横6mにも及ぶ大幅で、表具の裏には日蓮聖人以下の諸師や本法寺歴代住職、祖父母・養父母・子息久蔵などの供養銘が記されています。画面の中で嘆き悲

しむ弟子や動物たちが描かれ、自分をのこして先立った人々への哀悼と供養の想いが伝わってきます。(ネットより)

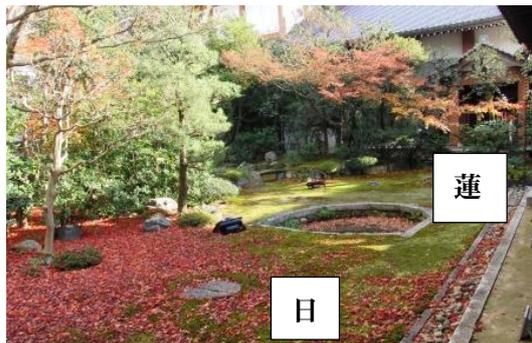
本阿弥光悦と本法寺

光悦(1558-1637)は、安土桃山時代から江戸時代にかけて活躍した芸術家で、その才能は多岐にわたり、書・絵画・陶芸・漆芸などに優れた作品をのこしています。

本阿弥家は元来、刀剣の鑑定や研磨を生業とする家柄で、足利幕府に仕えていました。光悦の曾祖父である本阿弥本光(清信)が、刀剣の鞘走が原因で足利幕府六代将軍義教の怒りに触れ、投獄された際に獄中で日親上人と出会い、教化されて熱心な法華信者になります。

爾来、本阿弥家は本法寺を菩提寺として支え、豊臣秀吉の命によって現在地へ移転を強いられた際に、光悦は父親の光二と私財を投じ、伽藍の整備に力を尽くしました。また、これにあわせて光悦によって造られたとされる「巴の庭」は、室町時代の書院風枯山水の影響と安土桃山時代の芽生えを感じる名庭です。昭和47年に修復され、昭和61年に国指定名勝となりました。

「巴の庭」は書院の東側から南へ曲がる鍵形で、広さはおよそ200坪におよびま



す。三箇所築山で巴紋を表現することから「三巴の庭」と呼ばれますが、巴の形は経年により解りづらくなっています。また、東南隅に石組の枯瀧が配され、縦縞紋様の青石によって流れ落ちる水を表現しています。いっぽう書院の縁側前には、半円を2つ組み合わせた円形石と、切石による十角形の蓮池が配置され、「日」「蓮」を表現しています。

光悦の代になると一族が日蓮聖人の遺文を筆写し、さらに日蓮宗の教義の本質的な理解を目指すと同時に、徳川家康から洛北の鷹ヶ峰を拝領し、そこにいわゆる芸術村をつくって、法華信仰に基づく寂光土を建設しようとするまでになります。いわば光悦にとって日蓮宗は、光悦の人格を貫き、生活のみならず芸術をも支える基盤にあったと考えられています。(ネットより)

付近散策



本法寺の山門を出て小川通りに沿って歩くと、表千家の不審菴、裏千家の今日庵が並び、茶道具や茶器を扱うお店もあり、落ち着いた佇まいを見せてくれる。
←表千家不審菴 裏千家今日庵→

